

高校生の学びと 大学入試改革

谷口典雄

たにぐち のりお
中部・東海大学入試検討委員会 座長
共著として『センター試験 その学力に未来はあるか』
(群青社、2011年)
現在、再任用教諭として高校現場でフルタイム勤務している

はじめに——なぜ文科省のプランは 「頓挫」したのか

文科省主導による二〇二二年入試からの大学入試改革は、「大学入学共通テスト」の二つの目玉が二つとも頓挫した。「英語民間試験の活用」は、公平でアクセスしやすい仕組みになっていないから「延期」。「記述式問題の導入」は、採点の精度や自己採点の難しさに関して受験生の不安を払拭できないから「見送る」。が、論理的

な思考力や表現力を評価するため、記述式問題の充実を検討せねばならないという。「論理的な思考力や表現力を育て伸ばすためには、大学入試において記述式問題が重要だ」という主張には賛同するが、文科省は、その目的を達成するための方法を見誤っている。

脚本家ジェームス三木が、プロとアマチュアの違いついて次のようなことを言っている。作品のテーマにプロとアマの差は無い。プロだからといって、アマが思い付かないようなテーマを思い付くわけではなく、プロと

アマの差は、そのテーマに沿って登場人物をどう動かすかというディテールの部分に現れるのだと。

自ら学ぶ力が必要だとか、論理的思考力や表現力を身につけさせるといふような「テーマ設定」は、現場教師でなくても、財界人でも文科省の役人でも（つまりアマチュアでも）思いつく。しかし、その力を身に付けさせる方法のディテールを模索しシミュレーションすることに関しては、現場教師の経験と知恵が必要だ。

今回の共通テストの「頓挫」に結びついた問題点は、現場教師が最初から指摘していたことだ。文科省はこれまで方法論で間違ってきたが、それは現場の声に敢えて耳を傾けようとせず、むしろ「現場教師がうまく教えないから」「よい教え方を教えてやろう」というスタンスから出発していたからだ。

一 高校生の学力低下とセンター試験

私が高校生の学力低下が気になりだしたのは、一九九七〜九八年頃。三〇年以上前だ。私の見立てでは、当時の高校生の学力低下には次の三つの要素が絡んでいた。

- ① 言語力の低下
漢字の読み書き能力の低下と、語彙の貧困。教科書が自力で読めない。耳で聞いた言語情報を捉えきれない。言葉で論理をたどる力も、言葉で論理を構築して伝えるスキルも落ちていく。黒板は写せるが、自分の言葉でノートをまとめることは苦手である。
- ② 知識量の不足と「知の物語性」の欠如
生活知が貧困で、共通教養が崩壊している。何かを学ぶ前に身につけておくべき知識が欠けている。知識の量が不足すると、知識と知識の間の距離が遠くなり、結果として知識がバラバラのままになりやすい。つまり、知の量的な不足が、知の「物語性」（＝知と知のつながりや意味）を見失わせている。バラバラに詰め込まれただけの知識は、実戦の場で活用することができない。
- ③ 知に向かう姿勢の劣化
興味が湧かないことに対しては最初から背を向ける生徒が増えた。そして、その「興味が湧く範囲」というのが極端に狭い生徒が多くなった。自分の知の裾野を広げようという姿勢が欠けている。例えば、地域のゴミ問題に関心が無い生徒にゴミ問題を考えさせても、お座なりの「主張」しか出てこない。